

<今日の説教のポイント コリントの信徒への手紙Ⅰ 1章4-9節>

問題山積みのコリントの教会への手紙の書き出し。パウロはまず神様への感謝とコリントの信者の豊かさについて記します。なぜなのか？

①人間に目をやるのではなく、神様を思うことから始める。生きるコツ！

パウロがここで（これを書いている時に）見つめているのは、コリントの信者たちではありません。では誰でしょうか？ 神様なのです！コリントの信者を見つめているなら、当然、パウロも、「どうしてそんなんだ！」と怒りたくなり、怒るでしょう。実際、この後、起こしている問題を厳しく非難する所も出て来ます。しかし、ここでは、すぐ彼ら、人間に目を向けるのではなく、神様に目を向けることをしているのです。どうしようもないと思える彼らに対して神様が行って下さったことに思いを向けているのです。すると、どうでしょう？ 感謝の思いしか、無いのではないのでしょうか？ 4節の「感謝」はそういう思いの、「神様への」感謝でしょう！

②パウロ独特の表現「キリストの中で」。そこに込めたパウロの思い！

今日のパウロの文章表現の中に、時々お話しします、パウロ独特の表現が2度使われています。それは、(あなたがたが)「**キリスト・イエスによって**」「**キリストに結ばれ**」と訳されている所ですが、これはギリシア語の原文では、どちらも「キリストにあって・の中で in Christ」と表現されているのです。今日はまず、「どんなときにも、気になる人間（自分も含めて）のこ、その状態から目を離し、神様を見つめることから始める。そうしたら心に余裕が出て来る」、ことを学びました。しかし、神様に目を向けると言ったって、具体的にはどうすればいいのでしょうか？ パウロはいつもそのことを、「キリストにあって」「キリストの中で」という独特な表現を使って考えていたのでしょうか。つまり、「いつもキリストの中にいること、いつもキリストのことから考えること」、「そのことが大事なのだ」というパウロの叫びが伝わってくるような気がします。

「では、これらのことについて何と言ったらよいだろうか。もし神がわたしたちの味方であるならば、だれがわたしたちに敵対できますか。わたしたちすべてのために、その御子をさえ惜しまず死に渡された方は、御子と一緒にすべてのものをわたしたちに賜らないはずがありませんか。」（ローマの信徒への手紙 8章 31-32節）